

# おぶせくらし図鑑

清水一宏さん・美佐さん

小布施町押羽地区で生まれ育ち、大学進学を機に上京した一宏さん。34歳でUターンし、家業の果樹農家を継ぎました。元同僚の縁で結婚した妻の美佐さんは生まれも育ちも東京の生粋の「都会っ子」。これまでと180度違う小布施町での生活のなか、自分らしさを模索しながら、今やすっかり地域の暮らしにとけこんでいます。そんなふたりの話をお聞きしました。



—まずは家族構成を教えてください。

**美佐さん**…4人家族で、子どもは、中2と小2の男の子のふたりです。夫の両親も同居しています。私は48歳、夫は51歳です。

一宏さん…普段は両親も含め4人で農業をしていて、繁忙期はバイトを入れています。作っているのは、桃とりんごがメイン。プラムと米作りもしています。代々農業はしていて、祖父母は專業でしたが、親父は兼業農家でした。俺の代からまた專業になりました。

—一宏さんのUターンと就農のきっかけは？

一宏さん…大学進学で上京し、卒業後は東京でアパレルブランドのプレス業務（宣伝・広報）に就職しました。その後、ファッションに特化した広告代理店に転職し、妻と出会いました。業界的に忙しい分、社員の仲がいい会社で、服飾ブランドのカタログを作ったり、展示会をしたり、「なんでも屋」のような仕事でした。

地元に戻ってきたきっかけは、よく聞かれるんですが、DNAじゃないかな。両親から「帰ってこい」と言われたわけではなく、当初は帰る気は全くなかったのですが、ふたり兄弟で弟がいて、そ

柄、道を歩いている人がみんな私のことを知っていて戸惑いました。そういう雰囲気すら知らずに飛び込んだので。

一宏さん…付き合っている頃も何回か畑を手伝いに来たけど、暮らしはわからないよね。

**美佐さん**…当時はスーパーマーケットが町にひとつしかなくて、ちょっとした買い物すら大変でした。「この先もずっとこの暮らしが続くのか。私は本当に何も考えずに田舎に来たんだな」と感じていました。

—そこから、どうやって地域の暮らしに馴染んでいったのですか？

**美佐さん**…ここに来た当初は「いい嫁に見られたい、家族に好かれなければ」という気持ちがあったので、嫁としてどう振る舞うのが正解なのか？と常に意識していた気がします。結婚してすぐに妊娠し、子どもが生まれたのですが、育児をする母親としての自分と、嫁としての自分、どちらも初めての経験で気を張っていました。時間が経って子どもが成長し、外に出る機械が増えるなかで、徐々に家族以外のつながりが生まれ、友だちができて馴染めていきました。

—家族以外の関わりが増えたきっかけは？



の妻から「弟が実家の農業を継ごうとしている」と相談を受けていたこと、仕事でよく「SHIBUYA109」に入っているギャル系のブランドに営業に行っていたなかで、この仕事を続けていく想像ができなかったこと、代理店の幹部職にも魅力を感じず、将来を考えないといけないと思っていた矢先に自分が大病を患ったことが重なりました。入院生活で帰郷を考えるようになったのかな。だから、やっぱりDNAですね。

それで、地元で就職先を探すつもりはなかったのですが、農業をやろうと帰ってきたら、親父が早期退職していたので一緒にやることになりました。ただ、昔から作業を手伝ってもいかなかったし、農業が嫌で東京に出ていったくらいなので、最初は農業自体を全くわかっていなかった。だから、ある程度は儲かるだろうと思ってはいたけど、蓋を開けたら全然

**美佐さん**…オープンな性格で、割とすぐに新しい人と仲良くなれるほうですし、子育てを軸に外に出るようになって

が広がりました。同じようなタイプが周りに集まり、気づいたらママ友を超えた気の合う友だちができていました。

一宏さん…それは個性だよな。今や俺が「美佐さんの旦那さん」と言われるくらい、地域に馴染んでいますから（笑）。

—それだけ価値観の合う友だちが増えたのですね。

**美佐さん**…そもそも、この10年ほどで結婚を機に移住してくる女性も、町自体の移住者も増えましたよね。私たちの元職場の後輩も、農業をしたいと小布施に移住し、定住しています。町内にツルヤ（スーパー）ができて住みやすくなりましたし、近隣の市町村にはおしゃれなお店が増え、長野全体が「東京から来たい」と思うようなまちに変わっていると感じます。

—ちなみに、移住やUターン前後で「想像と違った」というギャップはありましたか？

**美佐さん**…田舎はのんびりできると思っていたのに、いろいろな集まりや役回り

—專業農家になったことに対して、ご両親の反応は？

一宏さん…親からしたらウェルカムでしょ。土地があつて、誰かが継がないといけないから。ただ、稼ぐという観点では、親父は兼業農家だったし、バブル時代を経験していたので「なんとかなるだろう」という感覚だったと思います。俺は農業以外からの収入がなくなつたので、シビアな考えではないけど、稼ぐ意識はしていました。なので、積極的に畑を増やして、今は昔よりも面積が倍以上になって、売上は上がりましたね。農業は気候変動に対応しないといけないし、収穫は年に一回だからすぐに結果を出せない苦労がありますけど、それが專業農家ですから。

—農業に対するこだわりは？

一宏さん…クオリティを上げたい気持ちはもちろんありますが、クオリティと収入のバランスを考えながら、ある程度の品質で、農家集団「おぶせファーマーズ<sup>※</sup>」での販売も工夫しつつ取り組んでいます。「おぶせファーマーズ」では、選果や荷造り、価格設定などをなるべく自分たちでやって、全国の直売所や店舗の一角の「小布施コーナー」で販売しています。

※農家が抱える課題をチームで解決しようと、2019年に町と農家が協働で設立。約60人の農家が参加し、県内外に農作物を出荷し販売している。

—では、美佐さんは2007年の結婚を機に小布施に移住されましたが、町の第一印象は？

**美佐さん**…私自身に田舎がなく、田舎に帰る人の感覚がうらやましかったのもあって、最初は「私のような東京育ちが田舎暮らしをしたら面白いだろうな」という軽いノリでした。それに、留学経験もあったので、違う土地に住むことは好奇心もありました。でも「外国よりもやばいところに来ちゃったな」というのが第一印象です（笑）。特に押羽地区周辺は昔から住んでいる人が多い土地





があつて、思っていたより忙しいと思いましたが。

一宏さん…俺は、戻ってきた頃は、夜は真っ暗だし、飲みに行くのも車ではないと行けないし、昔は夜型の生活だったから朝型にすることに違和感があつて、ギャップだらけでしたね。今さら東京には戻れないというつらさもありません。農作業も、段取りも何もわかつていなかったので、ただ親父に命令されたことしかできず、休みもなく苦痛でした。3年目くらいに体ができてきて、農業のサイクルや段取りがわかつて、今はもう完全に日々のルーティンになっています。

—ご近所付き合いはいかがですか？

美佐さん…この地に嫁いだときは、なかなか人の名前を覚えるのが苦手なものであつて、ご近所のお名前を覚えるのも大変でした。押羽地区には婦人会というものがあり、そこに入ること、地域のつながりがいろいろと増えました。最初は婦人会への入会に抵抗もありましたが、役が回ってきたことで顔見知りが増え、結果的によかつたなと思つています。小布施には町民運動会や分館のスポーツイベントがあり、地区対向で戦うのですが、そういったものにも積極的に参加することで、気づいたら地域に溶け込んでいました。

—自治会活動の苦労はありますか？

一宏さん…面倒な活動もありますが、それをないがしろにするとコミュニティが成り立ちませんし、祭りなどは継続しなくなつてしまいます。俺だつて、出荷が始まつて忙しいときは、参加は無理だと断りますが、時間があるときはお互いさま。それに、この歳になると役がついて責任感が伴いますし、先輩たちがやってきたのに、俺の代で忙しいとは言えません。御柱祭も大事な行事のひとつ。特に押羽地区は何事も気合いが入りすぎるといわれますが、

美佐さん…東京から友だちが泊まりに来て深夜までみんなで飲んでいても、夫は、朝は絶対に起きて畑に行つていますね。日が昇るとともに起きて、日が暮れると寝るような暮らしです。友だちに驚かれるほど毎日コツコツと農業に取り組んで、ルーティンを崩すことはありません。

一宏さん…植物は日々成長しているの、こつちの理由で寝ている場合ではないからね。だから、ほかの農家からはストイック過ぎると言われることもあるけど、あと十数年は子どもたちにお金がかかるし、もう50歳だし、夜にいくら飲んでも朝は寝ていられない意識になつちやう。性格だからしょうがない。

—そうしたなかで農業の楽しさがありますか？

美佐さん…おいしいものができたときは、家族や親戚、友だちが喜んでくれるのが楽しみです。私自身、最初に小布施に来たときに、果物のおいしさに感動しました。りんごがこんなにおいしいなんて知らなくて、東京とは別ものを食べていると思うくらい。実家に送るとすぐ喜ばれました。結婚当初、両親は農家に嫁ぐことに心配していましたが、今は「おいしい農産物が近くにある生活は幸せだね」と言っています。

昔ながらの地域は、そういう自治会が多いですね。

美佐さん…自治会活動とは違いますが、「おぶせエバグリーンマーケット<sup>※</sup>」は楽しんで取り組んでいます。参加のきっかけは、第一目の開催時に「子ども用のワークショップがある」といので出店しました。翌年は仲良しの友人がスタッフになって声をかけられ、私も一員になりました。もともと代理店にいたのでイベントの開催に慣れていて、いろいろと関わっていくうちに「自分たちが楽しいことをやろう」と進化してきた感じです。今は農作業と主婦業と子ども



一宏さん…俺も、良質な農産物ができて売れることはもちろんうれしいですし、農業を楽しんで取り組むことは意識しています。ただ、最近はウクライナ情勢で世界規模での食糧危機も感じていて、楽しさとは違いますが、これからもっと重要な産業になってくるのかな。その点、まだ就農の魅力を伝える余裕はありませんが、町自体は農業がやりやすい土壌があると思つています。移住者も増え、町の許容力もあるので、まだまだ余力があると思つています。地域によつては、もっとクセがある人が多い土地もありますから(笑)。

美佐さん…私は、今は子育て中心ですが、今後、農作業以外の農業をどう広げていくか考えるのも楽しみです。

—では、子育てについても教えてください。

美佐さん…子育て環境はいいですね。町では高校卒業まで子ども医療費が無料、周辺市町村に比べて恵まれていると思います。昔は長野市なら保育園や幼稚園の選択肢があつていいなと思つていましたが、町に移住者が増えた今は教育へのさまざまな意見が上がつていきますし、これからさらに町が変わっていくと感じます。町外の人の受入れも柔軟に住みやすいですね。

もの習い事で時間に追われる日々ですが、「エバグリーン」など、自分が楽しめる時間をつくること、自分の居場所をいろいろと持つておくことは大事にしています。

※小布施総合公園を会場に90店以上が集まる秋のフェスティバル。

—それでは、今後の展望を教えてください。

美佐さん…農家の新分野の開拓という意味も含め、いつか店を開業してもいいように、先日、講座を受けて食品衛生の資格を取りました。今はまだ体制はできていませんが、いずれは何かやりたいなと思つています。

一宏さん…倉庫の周りにトレイラーハウスを置いて、快適なトイレを設置するなど、収穫後の果樹を荷造りするまでの環境をよくしたいと思つています。だから、最近ハマつていることはトイレ探しかな(笑)。それと、コロナが落ち着いたら家族で旅行に行きたいですね。

美佐さん…現実的ですね(笑)。私は冬になったらスノーボードに行きたいなあ。実は昨年、友だちに教えてもらつて47歳でスノーボードデビューしました。すごく楽しくて、もっとうまくなりたいし、たくさん滑りに行きたいです。いくつになつても新しいことにチャレンジ

一宏さん…俺は、できてはいませんが、なるべく子どもとの時間をつくらうとは意識しています。ただ、やはりこれから子どもの進学などでお金がかかるので、あと十数年はなかなかできないと予想しているものの、農業に忙殺されないことは心がけています。

—実際に子どもたちの様子はどうか？

美佐さん…楽しく過ごしていますよね。それに、今の子どもたちは宿題も多くて忙しそうだし、小布施には買い食いができる場所もないから、ワルになれません(笑)。真面目に育つていますし、このあたりでは「子どもがあんのへんを歩いていたら」などと教えてもらえるので、みんなに見守られています。



するのはワクワクしますね。

—最後に、それぞれリターンや結婚など、同じ立場で移住する方に向けて、アドバイスをお願いします！

一宏さん…今は昔より都会との距離感が縮まったので、地元でやりたいことができそうなことがあつたら、やってみよう方がいい。そして、すぐに諦めないこと。俺が帰郷する際、取引先のセレクトショップの社長から「都会とは生活が違うから、3年間は意地でもしがみつけ」と言われました。実際、3年目でだんだん体ができてきて、ベースもわかるようになってきました。だから、すぐに結果を出すような気持ちではなく取り組んでほしいですね。そのうえで、俺と同じ立場で戻ってくるのであれば、貯金はできるだけしておいた方がいい。田舎も意外にお金がかかりますから。

美佐さん…小布施暮らしのいいところは、旬のおいしい食、食べ物に困らないこと。野菜もお花も手頃な価格で手に入つて、日本の四季折々を楽しめます。スポーツやアウトドアもよい環境が整つていて、冬はスキーやスノーボードが楽しめますし、夏は湖や川遊びもできます。その楽しみができるのは、物質的な充実より豊かですね